

---

# SEVEN × SEVEN

ふぁみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SEVEN×SEVEN

### 【Nコード】

N3040F

### 【作者名】

ふぁみ

### 【あらすじ】

SEVEN×SEVENが交互に織り成す素敵な物語 リレー形式で二人の作者が短編を共同作成していきます 作者 1人 目はこの私ふぁみです。2人目は前に私が小説を書いたときに出てきたスカルです。（スカルは現実に存在します）【予測不能の展開が貴方をお待ちしております】

## 殺し屋さん「1」

穏やかな昼下がり。

僕はうつすらと汗をかいていた。姿勢をただし正座までして彼を見つめた。

彼はそれに応える様に僕に目を向けた。

僕はカラカラに渴いた喉に唾を流し込み声を絞り出した。

「ころっ、殺してほしい人がいるんです！」

彼はゆっくりサングラスを外した。余裕たっぷりだ。こうゆうのも慣れっこなのだろう。

「んなこと知ってるよ！だから俺がここに居るんだろが。なんでもいいけどお茶とかない？あとコタツの温度を弱にしてくれよ、暑くてしょうがねえ」

暑いのなら一先ず分厚い革のコートを脱げばいいのに。ポリシーなのだろうか？

とにかく彼は飲み物をご希望のようだ。僕はコタツを出るとドアノブに手をかけた。

「あっ、ちょい待ち。できれば菓子もよろしく、チョコ系のなし！いつてこい！」

僕は思った。殺し屋さんも所詮人間だなと…

僕は烏龍茶を持って殺し屋さんが待つ二階の自室に向かった。

「すみません、お菓子はなくて…」

彼はちらつと僕を見て視線をすぐテレビに戻した。

「ああ、いいよ。んで本題にいこうか。で、誰殺すの？」

以前、テレビに顔を向ける彼だが僕は気にすることなく答えた。

「殺してほしいのは……………」

殺し屋さん「2」（前書き）

初めまして。 スカルです。

今回笑い一欠入れるつもりありません！

ごめんね

## 殺し屋さん「2」

豊田 敦士です！！」

「ほう…奴か」

殺し屋さんは「豊田敦士」の名前を聞くと少し体が反応したように僕には見えた。

「殺し屋さん…あいつを知ってるんですか！？」

「ん？ああ…ん？まあ…ん？ああ…ん？」

殺し屋さんは知らないらしい。  
見栄はるんじゃないやねえよ！

喉まで言葉が出かけたが言ったら殺されそうなので僕は我慢した。

「なぜ豊田敦士を殺したいのだ？」

殺し屋さんは僕の部屋を自分の部屋にいるかの如く寝転がって聞いてきた。

「僕は小さい頃から力がない弱い人間だったんです。それをいいことにあいつは小学校からずっと今までいろいろな嫌がらせをするんです！！見て下さい！この体を！！」

僕は服を脱ぎ煙草の消された痕や殴られた痕、指の骨の形が変わった所などを殺し屋さんに見せた。

「親には言えずずっと今まで我慢してきました！けどもう限界です！！」

あいつを殺して下さい！あいつを殺さないと僕はもう自殺します！」

僕は泣きながら殺し屋さんに訴えた。

「俺は依頼された人間は必ず殺す。しかし請求額は高いぞ…2000万だ。」僕は愕然とした…

そんなの無理だ…

「そんな高額なお金なんて僕にはありません…」

「ならば豊田敦士は殺さん。帰る…」

僕は殺し屋さんが部屋から出ようとすることをただただ見てる事しか出来なかった。



もう死のう…

「おい、お前。

お前が死んでも俺には関係ないが今から言っ言葉を自殺して息がとまるまで覚えてろ。

人間死ぬ気になれば大抵の事はできる。死ぬくらいなら死ぬ気で生きろ。

じゃあな」

殺し屋さんはその言葉を残して僕の家を跡にした。

## 殺し屋さん「2」（後書き）

協力作品一個目終了!!

## 出会い「1」（前書き）

2回連続書きます。

コメディ要素はふぁみにまかせます

## 出会い「1」

どうも。

恋愛の貴公子事、天性のパラリスト、スカルです。  
マンガースです。

年齢は成人式

顔年齢は28

皆が憧れるcollege student

単位が取れないcollege student

借金しているcollege student

身長は176センチメンタル

体重は59ヘクトパスカル

スリーサイズは上から

80

60

80

なナイスばでい

もやし。

顔の出で立ちは妖怪人間べ。  
友人曰わく中の中。  
顔色悪し。

趣味はパラること。  
特技もパラること。

（パラストやパラるの意味が気になる人はふぁみが書いていた「ふぁみの生き方」ばられるっ！」をご覧ください）

パ<sup>ラ</sup>る事に関しては誰にも負ける気がしない。

現在彼氏居ず。  
もちろん彼女も居ず。  
ゲイではない。

ふあみは彼女が居。

死ねばいいのに…

死ねばいいのに…

ここまで頑張って読んだ人えらい！

むしろスカルの個人情報入手できてあなたはついている。

ちなみに愛するよりも愛されたい派。



そんなスカルが盗んだバイクで走りだした翌年にふぁみと出会った…

なんとも衝撃的な出会いだった…

のか！？

ぶっちゃけ書くことがない！！（笑）

後は任せた！

じゃ！

出会い「1」（後書き）

後に続けー！！！！！！

## 出会い「2」（前書き）

ふ  
あ  
み

## 出会い「2」

スカルとはネオン街の裏通り、魔が巣くうアンダーグラウンドで出会った。

そんな日本の法も通用しない混沌とした場所で、彼はひたすらドングリの殻を向いていた。ただひたすらに…

俺は知っていた。奴がスカルという男だと。

スカルは裏賭博の凄腕用心棒。  
名は風の噂で聞いていた。

俺はスカルの背後にまわると、背中に凶器を突き付けた。

「いてえじゃねえか」

流暢な日本語だ。日本人には見えないが…

「どうだい？凄腕用心棒でも身の危険を感じるかい？」  
さらに鋭利な尖端をスカルの背中に食い込ませた。

「ふん。馬鹿馬鹿しい」

スカルは素早くこちらに振り向いた。それと同時に俺の手から得物を奪った。

「ほお、いいドングリだ。こんなもん人の背中に突き付けるとは危険な奴だ」

彼はドングリをしげしげ見ながらニヤリとこちらに微笑んだ。

「褒めてくれてるのか？」

俺はスカルの手からドングりを奪うとガリガリと食べた。

「本当にクレイジーな奴だな。褒めてるに決まってるだろ？ブラザ  
ー！！」

スカルから差し出された手を握り、熱い握手を交わした。

スカルが俺を認めた瞬間だった。

祝いにお互いのお気に入りのまつぼっくりを交換し義兄弟の契りを結んだ。

ここから、スカルとふぁみの快進撃が始まる。

以上が出会いの全容だ。

しかし一つだけ気になることがある。

スカルが乗る原付きバイクが一年前パクられた俺のそれに似ているのだ…

## ベタ恋「1」（前書き）

ふぁみちゃんです。

## ベタ恋「1」

「もお！なんで起こしてくれなかったの？」

朝は苦手だけど、よりによってこんな日に寝坊するなんて

「私は起こしたわよ！」

起こされた記憶ないけどなあ、まあいつもそうだけど。

「スカル子！朝ごはんは？」

「ゆっくりしてる時間ないよ！遅刻しちゃう！！」

冷たくなったトーストをくわえ慌ただしく家を出た。

遅刻常習犯の私としては、毎朝の全力疾走も最近慣れてきた。でも今日は特に心臓の鼓動が早い。それは期待と不安の入り交じった特別な高鳴り…。

このままのペースでいけば間に合いそうだと時計を確認していると何かにぶつかった。

「痛っー！！」

地面に打ち付けたお尻を撫でながら視線をあげた。

「痛いじゃねえよ！どこ見て歩いてんだ！」

そいつは私に手を差し延べるわけでもなく不機嫌な顔を私に向けていた。

「私も悪いけど、あんたこそどこ見て歩いてんのよ！」

なんてデリカシーのない男なの？乙女には紳士的に対応するもんでしょ。

「お前なあ…ってそんな場合じゃねえ、遅刻しちゃう！」

そいつは凄いスピードで走り去っていった。ポカンとしながらも今の置かれた状況に気付き時計を見た。

「やばい！遅刻寸前！」

跳び起きると全力疾走を再開させた。さっきのやつ同じ高校の制服着てたけど同じ年なのかなあ。まだ言い足りない！今度見つけたらガツンと言ってやる。

なんて考えていたら学校は目の前だった。

緊張と早朝ランニングでバクバクの心臓に手をあて、一つ大きく息を吐くとゆっくりり門をくぐった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3040f/>

---

SEVEN × SEVEN

2010年11月23日16時45分発行